

令和5年度第1回自治体等FM連絡会議多摩地域会の開催報告

多摩地域会代表幹事 東村山市経営政策部
公共施設マネジメント課 高橋 純平

開催日時 令和5年8月8日（火） 午後2時から午後4時まで
会場 武蔵野プレイス 4階 フォーラム （東京都武蔵野市境南町2丁目3番18号）
参加者数 55人
内容報告

1 講演「ザ・公共施設マネジメントからの脱却 まちの再編

～発想の転換 ユルクトンガル アカルイミライ～

講師 合同会社まちみらい 寺沢 弘樹 氏

今回の多摩地域会では、合同会社まちみらい 寺沢 弘樹 氏から、これからの公共施設マネジメントへの取り組み方について、全国のたくさんの事例を交えながらご講演いただきました。

まず、行政の経営感覚を表す事例として、寺沢氏自らも関わった流山市のおおたかの森駅前市有地活用事業を挙げられました。この事業においては、民間活力を利用して施設整備に市の財政負担を発生させないことを重視した結果、コンテンツやプレーヤーが不在のまま毎年高額な指定管理委託料が発生する施設となり、エリアの価値の向上にはつながりませんでした。また、アオーレ長岡の事例では、まちのシンボルとして建築的価値の高い庁舎やアリーナなどの複合施設を建てたものの、周辺を中心市街地は空洞化する結果となってしまいました。

寺沢氏は、市民からの要望やマニフェスト、国からの要請などから出発し巨額の公金投資を前提とした計画を立て、庁内プロジェクトチームや市民ワークショップ、業務委託などで運営事業者・コンテンツ・収支計画の検討が足りないまま事業手法・要件整理を行い、損益分岐点や経営的なKPIの設定がないまま事業化し、ハコモノが竣工した瞬間がゴール、という従来型の公共施設マネジメントからの転換を提言します。すなわち、「何をしたいのか、どんな未来をそのプロジェクトで目指すのか」というビジョンの設定から出発し、ビジョンを実現するためのコンテンツを抽出し、それらのターゲットや実施主体、収支を想定する。そして、サウンディング型市場調査などでコンテンツの市場性を確認したら、市場性を反映した事業を小さな投資からスタートし、モニタリングしながらコンテンツを育てていく、という経営的な視点での公共施設マネジメントへの転換です。ハコはあくまでもビジョン・コンテンツを実現するための道具の一つという発想でした。

これらの話から、ハコモノを建てて終わりという従来の考え方から、本当の意味でまちの価値を向上させるために何が必要なのかという考え方に転換して取り組まなければいけないと感じました。財政状況が厳しい中、施設の更新費用の削減ばかりを重視するのではなく、それ以上にまちを魅力的にするための取り組みを打ち出していくことが大事だと改めて認識しました。

また、まちの人が何を求めているのか、どんなプレーヤーやコンテンツが必要なのかを探るために、まちに出て自らお店を利用したり、まちの人と触れ合ったりすることが大事という話も印象的でした。



2 その他

終了後に行った参加自治体へのアンケートでは、「まずは、自分の自治体で本当に実現したいことはなにか、改善すべき一番のポイントはどこかを徹底的に自分たちで見つめ、発見し、ビジョンを持った上で取り掛かっていくことが重要だと思った。」「どのように各自治体が考え取り組んだのか、多くの先進事例を紹介いただけたので、現在の業務で思考が行き詰っていた部分を考え直すヒントになった。」「聴講前は、単純に財源不足から PPP・PFI を選択肢としてとらえていたが、公共施設が完成するまでが到達点ではなく、その後のまちづくりに有用な手段であると認識することができた。また講義のいたるところに今までの行政感覚に刺激を受ける場面があり、とても良い機会となった。」などの感想をいただき、多くの自治体にとって、考え方の整理や視点・意識の転換に役立つ講演となったと感じています。

今後も、FMの取組を進める各団体の活発な連携や情報共有の助けとなるよう、引き続き多摩地域会を開催したいと考えております。みなさまのご支援、ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。